

## 審査を終えて

千葉大学名誉教授 鈴木 春男

### 中学生の部

本年は第十二次交通安全基本計画の始まる年です。前回の交通安全基本計画では、令和七年までに交通事故死者数を二千人以下にするという目標は達成されませんでした。確実に死者数は減少してきています。これは官民が多方面から連携して取り組んでいる交通事故防止対策のすばらしい成果だと考えられます。しかし他方で、年間二千人以上の方々が悲惨な交通事故で亡くなっていることにも注目すべきで、そうした悲惨な事故を無くすためには国民一人一人が自ら進んで交通安全を守ろうとする自発的な行動が不可欠です。

交通安全ファミリー作文コンクール「中学生の部」は、そうした自発的な交通安全行動を動機付ける貴重な場である「家庭・学校・地域」の中で、重要な役割を演じてもらわなければならない中学生の意見が伝えられ、本人はもちろん多くの方々に交通安全の重要さに気付いてもらう大事な事業です。今回もそうした事業にご協力いただいたご本人はもちろん、ご父母、ご指導いただいた先生方、またそれぞれの学校ならびに関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。

本年度、残念なのは、応募数が昨年より減少したことです。具体的には、本年度の応募総数は二千四百八十七点（中学一年生・九百八十七点、二年生・八百三十九点、三年生・六百二十点、学年不明四十一點）で、前年度の応募総数三千三百七点に比べて四分の一ほど減っています。応募作品は、学校を通じて提出されるケースが多いのですが、中学生の間でもネットが普及し、長い文章を書く機会が少なくなってい

ることの反映かも知れません。しかし多くの中学生がどうしたら交通安全が守られるかを一生懸命考え、作文としてまとめることは、何よりも自分自身を交通安全に向けて動機付ける結果となり、学校における交通安全教育の重要な施策となります。本事業が交通安全に資することを全国多くの中学校に理解していただき、協力をお願いすることが重要だと考えています。

今回の審査では、その応募作品の中から、教職経験者や編集経験者、国語の教員免許取得者等五名の審査員による予備審査を経て、一次審査に中学一年生、二年生、三年生それぞれ十点ずつ計三十点が残され、それを本審査会（七名で構成）審査員が事前に評価して「審査評価集計表」としてまとめ、さらにその「審査評価集計表」をもとに審査員出席の審査会で厳正な審査・討議を重ねました。その結果、最優秀作（内閣総理大臣賞）一点、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）各学年一点計三点、優秀作（文部科学大臣賞）一点、佳作（警察庁交通局長賞）七点が選ばれました。そして、最終的には最優秀作および優秀作は警察庁長官、佳作については警察庁交通局長により決定されました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、福島県の中学三年生、鈴木彩花さんの「家族でつなぐ交通安全の輪」でした。青信号になり自転車で横断しようとした際、左折のため右から曲がってきた車に危うく轢かれそうになった数日後、学校での交通安全教室で反射材の有効性を学んだ筆者が、それを夕食時に家族に伝え、安全を守るための対策を皆で話し合う様子が描かれています。さらにこの家族の素晴らしさは、父、母、姉たち、そして本人と、家族全員が約束した安全対策を実行していることで、その姿がよく示されていました。

次に、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）ですが、中学一年生からは愛媛県の大脇理緒さんの「後悔の前に行けること」が選ばれました。大好きな祖父が自転車走行中、ルール違反の車に起こされた事故の紹介から始まり、幸いヘルメットを着用していたために命を落とさずに済んだことに話が進みます。さらに、車と自転車の双方が相手を確認することが重要で、「だろう」「はずだ」ではなく、「かもしれない」という気持

ちを持つこと、自分の存在を相手に知らせることの重要性が上手に示されていました。

中学二年生からは宮崎県の小田原みろくさんの「右、左、右っ!!」が選ばれました。優しくて大好きだった祖父が亡くなった後、その祖父が長女を横断歩道でトラックに轢かれて失ったことを父から知らされます。そのことで、散歩中に祖父から標題にある注意をされていたことの意味を理解し、一層、祖父への思いと交通安全への強い意志が伝わってくる素晴らしい作品でした。

中学三年生からは埼玉県の金子由奈さんの「守りたいもの」が選ばれました。横断歩道のないところを渡るうとした小さな子供に危険を感じ、横断歩道まで誘導して一緒に渡った心優しい筆者の態度と、大人は子供の見本にならなければならないことを、自分への教訓も含めて述べている点が素晴らしいと思いました。さらに、交通ルールにはすべてそれを守らなければならない理由があるので、ただ単にルールを教え守らせるのではなく、その理由を示し理解してもらうことで皆が守るようになる、という主張は秀逸でした。

優秀作（文部科学大臣賞）には、埼玉県の岩館璃沙さんの「交通マナーの大切さ」が選ばれました。小学校に面した自家の前の道路に、学童保育所に子供を迎えに来た保護者の車が多数駐車しているのを見て、そこで交通事故を心配した筆者が、家族で安全対策を話し合い、その危険な状況を両親が学童保育所に伝え、早速に対策が講じられます。自分自身の学童での体験も交えながら、安全に向けての問題解決を家族ぐるみで実行に移す過程が描かれていて素晴らしいと思いました。

佳作（警察庁交通局長賞）には以下の七作品が選ばれました。愛知県の中学一年生、伊藤新太さんの「お互いに気をつけなとね」は、自分が住んでいる地域の日帰り温泉で、出口と入口を間違えた観光客の運転から危険な目にあつた体験をもとに、母の言葉から、他者への責任追求だけでなく、自分自身にも気を付けるべき点があつたことを理解する過程が上手に描かれていました。

愛媛県の中学一年生、馬越真那さんの「いつか自分に返ってくる運転」は、「忙しいときほど、人に優しい

運転をしなきゃね。いつか自分に返ってくるから」と筆者に諭し、自ら実行している母の態度に感銘し、余裕を持って行動することの大切さを自覚する過程がよく描かれている作品でした。

富山県の中学一年生、岡志織さんの「交通事故から学んだこと」は、通学時に姉と乗っていた母の運転する車が右折信号で曲がったところ、信号無視の直進車に衝突された事故経験をもとに、被害者と加害者の両面から交通安全を考察し、そこから加害者になることへのつらさ、車だけでなく自転車も、また歩行中ですら、加害者になる可能性があることを示した作品でした。

栃木県の中学二年生、青木心音さんの「ルールを守る人を増やすために」は、信号のない横断歩道を渡る際、折角車が停まってくれたのに、身振りや声で車を先に行かせる臆病で慎重な自分の性格を先ず示し、車が停まったら感謝の気持ちを表して渡るべきだという母の意見と対立する。しかし、運転者でもある母の言葉を受け入れ、停まってくれた車に一礼して渡ってみると、自分もドライバーも気持ち良く対応出来た。その経験から、ルールを守る人への感謝の気持ちや態度で、ルールを守る人が増えていくという主張がなされていました。

宮城県の中学二年生、高石孝樹さんの「ほんの少しの意識で」は、小学五年生時、自宅前の路地から道路に出た際、自転車にぶつかり転倒した体験を材料に、自分の不注意を反省し、そこから自分が音頭をとって家族全員で交通安全のためのルールを話し合う。そして注意すべきことを織り込んだ標語作りに励む過程が上手に描かれている作品でした。

兵庫県の中学三年生、新美りをさんの「笑顔の未来へ やさしく運転を」は、中学生として成長した視点で小さな子供たちの安全を切望した筆者が、二回の衝突事故を目撃し、事故は当事者や家族を傷つけるだけでなく目撃者をも傷つけると実感し、そこから技術の進歩による安全対策を様々に考えアイデアを提起している点が高く評価出来ました。

神奈川県の中三年生、吉田爽帆さんの「合言葉は『左右オーライ』」は、母のバイク事故、自身の青信号

横断時にあつた無謀な自転車との事故、二つの事故体験からルールをただ守るだけでなく、左右の確認が大事なことを認識する。特に車の運転中は同乗している家族も一緒に左右を確認し、運転者と同じ立場に立つことが必要で、しかもそのことが同乗者の安全への動機付けになることが述べられていて素晴らしいと思いました。

最後に、数多くの応募作品の読み込みと絞り込みにご尽力いただいた予備審査員および事務局の方々、さらにはまた本審査会において真剣かつ厳正な審査に当たっていただいた審査員の方々に心からのお礼を申し上げます、審査の報告とさせていただきます。

令和7年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員  
— 中学生の部 —

(敬称略、順不同)

---

鈴木春男	千葉大学名誉教授
溝端光雄	交通評論家
吉岡耀子	交通ジャーナリスト
青海正	全日本中学校長会会長
塩崎一馬	公益財団法人三井住友海上福祉財団専務理事
中園和貴	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
井澤和生	警察庁交通局交通企画課長